ラジオ人生

関戸祐守

僕はラジオ人間。ラジオは、本当に力を持っている。その秘密の力の話し。ちょっと耳を傾けてくださると嬉しく思います。

幼い頃の夢を叶え、和歌山放送のアナウンサーとして、アナウンサー人生が始まった。やがて開局まもないＦＭ大阪に移り、以来、ラジオと共に歩んできた。

２０１１年３月11日に発生した東日本大震災。この緊急事態にラジオも、大震災発生の第一報、被害状況の続報、安否情報、避難所や給水所などの緊急時・非常時のライフライン情報を伝え、報道メディアとしての役割を果たしている。

でも、この未曾有の事態に、ラジオが本当にしたことは、「人の声」を届けたことだった。単なる音ではない。生きた、人の声だった、と思う。「電気も水道も電話も使えない中、唯一外と繋がるものがラジオでした」「何も状況が掴めず不安で心細かった時に支えてくれたのは、普段から慣れ親しんでいるアナウンサーの声でした」情報を伝える音声が、人が語りかける言葉となり、それが、ぎりぎりの極限状態の中に届いた時、大きな力となり、被災者にとって生きる強い支えともなる。それが、ラジオが持つ力だ、と。

１９９５年1月17日の阪神淡路大震災。当時、住んでいた京都から、やっとの思いで大阪入り。社内は踏み場もない。そんな状況の中、気が付く、神戸の現場に立っていた。

何を見ても、どこを見ても、見たこともない凄惨な光景。がれきの間を縫いながら、歩いた。跡形もなく崩れたわが家の前で呆然と立ち尽くしている人がいる。話を聞いても言葉は返ってこない。それをそのまま伝えた。現場で、いま、何が起きているのか。そのことを伝え続けた実況の数は、50回。涸れ果てた声で実況を終えたのは、日付も変わる真夜中。そ

の時、朝から水一滴さえ口にしていないことに初めて気付いた。

当日、ＦＭネットワークの中で一人現場に入り実況中継したのは僕一人だったと、後で知った。すべてを伝えられたわけではないけれども、語ることによって、語られないことも伝わる。言葉には、その力がある。そのことを阪神淡路大震災時の現場生中継で感じた。

それまで、報道番組から深夜番組まで担当。ディレクター兼ミキサー兼アナウンサーとして、企画から演出、喋りまでこなすワンマン番組の制作。ＦＭ大阪の看板番組「阪急アワーあなたと夜と音楽と」の目玉の宝塚コーナーも受け持ち、大の宝塚通とされるほど宝塚歌劇団との関係も築いた。お蔭で、周りからは、「一世を風靡した」と言われた活躍の場にも恵まれた。ＦＭ東京へ出向時は、全国ＦＭ放送協議会、ジャパンＦＭネットワーク事務局長を務め、全国各地２０局のＦＭ放送局立ち上げに奮闘し、ラジオ番組の制作から放送局網作りまで、ラジオに関わるすべてに携わってきた。ラジオのことは、分っているつもりだったが、阪神淡路大震災時の現場生中継を通じて、改めて、伝えることと伝わること、そこに働く言葉の力、そうしたラジオが持つ力のことを、身に沁みて感じた。

このところ、大きな災害が起こると、その時に果たしたラジオの大きな役割が「ラジオの底力」という言葉などで報道される。伝え手の存在が感じられることで安心感が生まれ、伝えたいことが伝わる。ラジオの向こう側で伝える者と、ラジオの前で耳を傾ける人。一方的に伝えるのではなくて、伝える声が人と人とをつなぎ、絆を生む。それが、ラジオだ。

思えば、入社したばかりの会社を辞めて心機一転、アナウンサーを志したのも、小学校高学年の幼き日、２年間の入院

生活をラジオが支えてくれたからだ。ラジオを聞いている時僕は、ラジオと会話をしていた。そう、ラジオは、語りかけてくるメディア。一対一のメディア。単なる情報の伝達、不特定多数の人に対して一方的に伝えるのではなく、ラジオの前の、ラジオを聴く人と一対一でつながり、絆を育む。それがラジオの持つ力だ。

今はクロスメディアの時代。インターネットの普及により、チャットやツイッターで放送中の喋り手とリアルタイムでのやりとりへと、ツーウェイ、双方向が当たり前だ。ラジオとリスナーとの関り方の変化は、それだけラジオの可能性が広がっているということだ。

じゃあ、こんな状況の下、ラジオ放送で大事なことは何だろう。それは、喋り手、パーソナリティーの個性が、そのまま素直に出て来ること。つまり、「本音を出すこと」。喜怒哀楽を大切に、暮しに密着した情報を伝える。井戸端での会話のような、たわいもない情報。そこに親近感が生まれ、そこから「また聞きたい！」と思わせる親しみが生まれる。そんな親しみ易さが生まれるのも、ラジオならではだ。

そして、♪音楽、励まし、情報。何であっても、繰り返し繰り返し伝えることができる。災害時には、災害情報、安否情報、生活情報……などが繰り返し繰り返し伝えられ、必要としている人の元に届いた。リピートできる。これもラジオの良さ、大きな力のひとつだ。

映像は、強い伝達力を持っているけれども、画面に目を向ける必要がある。けれども、音は、声は、聞くともなしに聞こえてくる。歩いていても、考えごとをしても、耳に響いてくる。そして、心に届く。その音声を伝えるのが、ラジオだ。ラジオがＯＮされると、瞬時に番組が流れ、素晴らしい音声の世界が始まる。それが、たったひとつのボタンで実現する。

こんな便利なメディアが他にあるだろうか。時代が変わろうとも、メディアが多様化しようとも、ラジオは変わらない。瞬時であること、音声があること、言葉があること、言葉を通して人の温もりが伝わる。だから、僕は、ラジオが好きだ。

人は孤独な生き物。人の声を求めてやまない。そんなラジオの前にいる人たちの元に、温もりを伝え続けていきたい…これが、ラジオが好きな僕の願い。ラジオが好きな人が増えること。ラジオが好きな人が、もっとラジオに関われるようになること。仕事として携わってくれたら、本当に嬉しい。これが、ラジオが大好きな僕の、ささやかだけれど、心からの想い…僕の中で、決してさめることのない、夢だ。

以上が、僕の、ラジオ愛の、物語り。忙しい中、耳を傾けてくださってありがとう。感謝します。もし、よければ、ラジオの未来のお話し、少しだけ、お付き合いください。

通常ラジオ局というのは、三つに分かれるんだ。圏域放送局、コミュニティ放送局、ミニＦＭ局の三つだ。それぞれで、発信する電波がカバーする周域範囲が異なり、放送を伝える範囲が変わってくる。圏域放送局の東京キー局ＴＯＫＹＯＦＭならば首都圏を、コミュニティ放送局である世田谷ＦＭは世田谷全域をカバーしている。この二つは、国の認可が必要だ。これに対して、ミニＦＭ局は、電波のカバー範囲が１００ｍと個人で楽しむ範囲であるため国の認可は必要ない。町内会で楽しむ感じと思ってもらっていい。

電波がカバーする範囲が広ければ広いほどいいかと言うと、そういうわけではない。カバー地域が限られるということは、逆に、その地域ならではの情報、地域に密着した情報を届けられるということだ。東日本大震災の時は、通信施設が破壊され、広域の電波が届かなかった地域にも、各地で立ち上げられたミニＦＭ局から、生きていくのに必要な生活情報が、どんどん変わる状況に合せてきめ細かく届けられ、大

勢の役に立った。情報の届く範囲が狭まるほど、情報の影響力は強くなる。
そういう意味では、大きな可能性を秘めているのが、コミュニティ放送局なんだ。コミュニティ放送局なら、地域に密着した情報を発信しつつ、キー局からの品質の高い番組の供給を受けることができる。この二つを混成した番組編成とすることができ、ラジオの特性が発揮される。
これは、実は、アメリカでもう行われている。それも、30年以上前からだ。そして、もう一歩先を行っている。
日本より圧倒的に広いアメリカでは、コミュニティラジオ局が無数に存在し、それぞれ特色ある番組を放送している。その番組そのものも販売されている。シンジケーションシステムといって、直接番組を制作するのではなく、制作された番組が販売される枠組みがある。局を超えて、番組が販売されるから、コミュニティ放送局から火がつき、スターダムへ登りつめたスターもどんどん出てくることになる。
となると、大事になるのは、喋り手、パーソナリティーということになるね。ラジオは情報の伝達だけでなく、人とのつながりを育むメディア。いろいろな人が個性を発揮して、番組が制作され、ネットワークが広がっていく。それも、僕の願いではある。
以上が、ラジオの未来の話しだ。と言っても、僕の夢の話になってしまったけれど。ここまで、お付き合いくださって、ありがとう。
僕の夢や願いは、語って終わりじゃないんだ。実現する場も設けています。パーソナリティーになってみたい。本格的にアナウンサーを目指したい。あるいは、日常の、伝え方や話し方が思うようにできるようになりたい。そんなささやかな想いにも、応える場を用意しています。あるいは、志大きく、コミュニティ放送局を立ちげたい、という場合、ＦＭ放

送局２０局立ち上げの経験を活かした現実な支援もいたします。

　興味をお持ちの方は、下記の各問い合わせ先にご連絡ください。お待ちしています。